

台に帰り、保春院の開祖となる。寛永13年5月、政宗葬儀の導師を勤め、瑞鳳寺が創設された時、清岳を開祖と定められた。正保元年〔1644〕8月12日示寂、66歳。勅諡して仏慧道光禪師という。

注(2) (唐の門下省の次官たる黄門侍郎の職掌に似ているからいう)中納言の唐名。

注(3) 越前守。

注(4) 近衛府の唐名。

注(5) だんおつ、だんおち。仏家が財物を施与する信者を呼ぶ称。

注(6) 十千の丁の異名、丁の歳の異称。

注(7) 十二支の丑の異名。

注(8) 陰暦10月の称。

注(9) 全186巻186冊。諸大家名の提出した家譜を太田資宗、林羅山(道春)等に命じて編纂させ寛永20年〔1643〕9月25日完成した。別名「寛永系図」、「寛永系図伝」、「寛永諸家系図」。

資料 貞山公治家記録巻之39下(「伊達治家記録」4。「伊達家治家記録-性山(輝宗)公、貞山(政宗)公-」の内)

124 「大崎耕土」の「耕土」とは

問 「大崎耕土」という呼び名は、何から起ったのでしょうか。「耕土」について辞書を引いても、これに当てはまるような意味はありませんし、また全国的にも、このような使い方をしてる所は見当りませんので、是非このことを解明したいのです。

答 まず、「耕土」とは土壤の最上部で、耕勸されて、作物の根が蔓延できる部分、地表から230cm位までの土の層のことで、作土ともいわれます。また、土を耕やすことでもあります。ですから、国土地理院の示す自然地域名称(固有名詞+普通名詞)の普通名詞部分(山脈とか、平野とか盆地とか湾など)に採り上げられる用語ではありません。従って、お尋ねの「大崎耕土」は俗称と言うべきで、正式には「大崎平野」と称せられるところでもあります。にも拘らず、「大崎耕土」と習慣的に呼称され、少なくとも県内においては、或る程度ポピュラーな呼び方となっているのです。

これについて述べているものに、「わが古川」(菅原朝歌人著、大正14年古川町役場発行)があります。すなわち、『〔大崎耕土とは〕大崎耕土の四文字は世間によく使われる熟語であるが、元来『耕土』とは土地を耕やすことである。最も〔マ、〕耕やした田畑を耕地といひ、耕地整理な

ど、云ってはをるが — 併し大崎広土若しくは大崎曠土であるべきものが、時代の変遷進歩につれて、広土変じて耕土となったものであろう。筆者もまた便宜上『和製の熟語』として、こゝにこれを使用しておく』と記しながら、同書の他の個所では、『大崎耕土』『大崎平野』『大崎の沃野』などの多様不統一な表現を見せています。それはそれとして、「大崎耕土」の称は「大崎広土（または曠土）」の称の時代的変形であることが知られます。時代的ということは、「大崎耕土」の表記が、文献上に現われ出すのが、明治30年以降に属することだからです。しかも、それが知識階級の漢字力の下降と直接かゝわりをもちながら、徐々に拡大していくことにあります。

「大崎耕土」と呼ばれる大崎地方は、古くから広大な穀倉地帯で、伊達忠宗の命によって碩学内藤以貫が著した「仙台封内山海之勝」（「仙台叢書」別刊「仙台金石志」下の内「仙台金石志附録」⁽¹⁾ 卷2）に、次のことが記されています。

『（前略）若夫遡于国之中央。而犬牙相並者。七森也。七森之陰。大崎也。浩々沃壤。四山如黛。⁽²⁾ 羅鷹之林。牧馬之野。名区勝跡相望焉。（下略）』

これより百余年の後、「封内土産考」（里見藤右衛門著、寛政10年〔1798〕跋、「仙台叢書」第3巻の内）に、

『大崎浩蕩〔こうとう〕又広稲〔こうとう〕とも云へり。田屋連綿と關〔ひら〕けたるの地を、俗呼て俞〔しか（然）〕云へり。加美・志田・玉造・遠田・栗原の五郡なり。往昔大崎義隆の領地なり。天正年中其家滅しぬ。田畑殊に多く土地尤〔もつとも〕肥膏にして、米穀抽て〔ぬきんで〕多く産出す。他邦と云〔いえ〕ども当つべからず。』と書かれています。

この「浩蕩」また「広稲」こそ、広大な沃土を表現する最適の熟語で、「広土」「曠土」とその変形「耕土」のルーツだったのであります。

大崎耕土とはほぼ同等の地形的・農地的条件にある名取・金成地域も、浩蕩とか広稲と称せられてきたところですが、いずれも耕土と呼ばれるようになって今日に至っています。「耕土」は、もともと任意な通用語だけに、次第に拡大使用されるようになり、大崎・名取・金成のいわゆる三耕土のほか、今では利府耕土・迫耕土・高砂耕土・北上耕土などの濫称に類する称呼を生ずるまでになってしまいました。

「浩蕩」・「広稲」→「広土」・「曠土」→「耕土」。このような用語改変の仕方は、他処に類を見ない特異なものであります。しかも、単純直線的な変化過程である筈はなく、まちまちな混用をも、一時的逆行をも含みながらの進行でした。そこで、それらの用語の現われ方を、図書資料の上に見るため、刊行年順に排列すると次の通りになります。

1. 「仙台封内山海之勝」（内藤以貫、万治元〔1658〕以前。〔再掲〕）

『大崎……浩々沃壤……』

2. 「伊達便覧志」卷之14（佐久間洞巖、元禄15〔1702〕序、「仙台叢書」第3巻の内）⁽⁴⁾
『宮城郡小泉の邑中、少林〔わかばやし〕……其地浩蕩と開て……東は海上を窮め、南は武隈

〔たけくま〕の故館を限り……〕〔名取浩蕩〕

3. 「封内土産考」(里見藤右衛門、寛政10〔1798〕跋。〔再掲〕)

『大崎浩蕩又広稲……』

4. 「宮城県地誌提要」(宮城県師範学校編、明治14)

『……中央ヨリ東部ニ至ル、田畝遠ク相連リ、大崎金成名取等ノ地ハ沃土ヲ以テ称セラレ……』

『〔名取郡〕東ハ平衍ニシテ良田多シ』

『〔志田郡〕其他ハ地勢平坦、田野曠濶ニシテ……』

『〔栗原郡〕東ハ良田沃土遠ク登米郡ニ連リテ……』

5. 「仙台案内」(庄子輝光編、明治23)

『宮城名取の広稲を一瞥して限界の極まる処……』

6. 「宮城県誌」(宮城県教育会中央部編、明治31)

『〔名取郡〕阿武隈川より、名取川に至る間、一帯の平野を名取耕地といふ。南北に延びて、亘理、宮城の二郡に及び、米を産することを甚多し。』

『〔志田郡〕此の地方は、土地率〔おおむね〕平坦にて、沃野数里に亘る。謂はゆる大崎耕地と称するもの是なり。』

『〔栗原郡〕山〔栗駒〕の南方より、発する川、三ツあり。一ノ迫、二ノ迫、三ノ迫と云ふ。下流合して迫川となる。此の間一帯の平野を金成耕地といふ。』

7. 「刪修〔さんしゅう〕宮城県誌」(宮城県教育会、明治32)〔逆行〕

『〔名取郡(なとりごほり)〕

阿武隈川より名取川に至る間の平野を名取広土(なとりくわうと)といふ。南北に延びて、亘理、宮城の二郡に及び、米を産すること甚多し。』

『〔志田郡(しだごおり)〕

此の地方は、土地、率〔おおむね〕、平坦にて、沃野数里に亘る。所謂、大崎広土と称するもの是なり。』

『〔栗原郡(くりはらごおり)〕

栗駒山より発する川、三あり。一ノ迫、二ノ迫、三ノ迫といふ。下流合して、迫川となる。此の辺、一面の平野を金成広土といふ。』

8. 「大日本地名辞書」第7巻(吉田東伍、明治39)

〔玉造郡〕

『本郡は、加美、志田、遠田等と形勢相抱きて一区を成す、即大崎氏の割有せる域とす。されば、通じて此諸郡を大崎領といひ、……大崎は、当時殆統郡の汎名たりき、又之が故のみ。諸書、或は大崎郡の濫称あり、又、大崎広土の俗称ありて、江合、鳴瀬、両川の沖積平野に呼ばる。広土は、其言義を詳にせず、国府処(コフト)の義にて、もと国府(もしくは郡家(コホ))の、平

坦なりし地に名づけたものか。』

9. 「宮城県案内」（宮城県主催第10回東北区実業大会編、明治40）
『仙南に名取^{〇〇}広^{〇〇}土あり、仙北に大崎^{〇〇}広^{〇〇}土ありと雖も……』
『志田郡……大崎^{〇〇}広^{〇〇}土の中央に位し……』
10. 「三本木案内誌」（三本木町編、大正2）
『三本木ノ地北ニ大崎^{〇〇}耕^{〇〇}土ノ沃野ヲ控ヘ……』
『北部ハ一般ニ平地ニシテ所謂大崎^{〇〇}耕^{〇〇}土ノ一部ヲナシ鳴瀬川及多田川ノ沿岸及此ノ二川ヲ以テ囲ミタル地ハ地味肥沃ニシテ耕作ニ適セリ』
11. 「志田郡案内誌」（志田郡役所、大正2）
『志田郡ノ地所謂大崎^{〇〇}耕^{〇〇}土ノ中央ニ位シ四圍無限ノ宝庫ヲ控エ……』
『地味は所により一様ならざるも古来大崎^{〇〇}耕^{〇〇}土ノ中心として推称されたるの地田畑多く農業に適する地質たり。』
12. 「加美郡誌」（加美郡教育会編、大正14）
『中新田町以東は、地相平坦にして沃野相連り、所謂大崎^{〇〇}耕^{〇〇}土の一部を成せり。』
13. 「名取郡誌」（名取教育会編、大正14）
『東部一帯は頗る平坦にして沃野遠く相連り所謂本県三大^{〇〇}耕^{〇〇}土の一たる名取^{〇〇}耕^{〇〇}土を形成す。』
『本郡は古来より名取^{〇〇}耕^{〇〇}土と称せらるゝの地、従て米の主要産物中第一位にありたるは言を待たず』
『名取^{〇〇}耕^{〇〇}土南北に走り……』
14. 「わが古川」（菅原朝歌人、大正14。〔再掲〕）
『大崎^{〇〇}耕^{〇〇}土の四文字は……大崎^{〇〇}広^{〇〇}土若しくは大崎^{〇〇}曠^{〇〇}土であるべきものが、時代の変遷進歩につれて、広土変じて耕土となったものであろう。（下略）』
『大崎^{〇〇}平^{〇〇}野』
『沃野^{〇〇}万里のわが大崎^{〇〇}の地……』
『大崎^{〇〇}の沃野』
15. 「宮城郡誌」（宮城郡教育会、昭和3）
『東南の部落は広漠たる沃野連亘し、土壤肥饒にして米麦穀菽に適す、即ち利府^{〇〇}耕^{〇〇}土と称へ其名晨〔つ〕とに著る。』
16. 「わしが国さ」第17号（仙台協賛会、昭和4）
『小田原の田圃と高砂^{〇〇}耕^{〇〇}土との中間にある此の一帶の小丘陵を縫ふ大街道に沿ふた松原並木〔案内松原〕の景色は仙台名物の一つに推すべきもので……』
『大崎^{〇〇}平^{〇〇}野とは志田、加美、玉造、栗原、遠田の五郡に亘る茫莫たる沃野の総称であって宮城県産米では県内の主位を占めてゐる。……花園天皇の正和の頃から大崎氏の所領となったので、此

五郡を大崎五郡、平野を大崎平野と称する様になったのである。』

17. 「宮城県名勝地誌」（宮城県教育会編、昭和6）

『仙台以南一帯は、所謂名取耕土と称され、地、平坦、且つ肥沃で灌溉排水の便もよく、稲作耕地として最も天恵の地である。……本耕土の全面を……』

『大河原町……概して平坦で、大河原耕土、大谷耕土と呼んで……』

『仙北米の主産地。仙北十一郡中大崎耕土（加美玉造志田遠田の四郡）は其主耕地である。』

『古川町……特に通信、交通、産業に於ては大崎耕土（加美、志田、玉造、栗原）の中心都邑……』

『江合鳴瀬の両川の間展開せられた平野が、即ち、大崎耕土なのである。』

『仙台市……左手はさへぎるものなき広々とした平地で、南方はるかに岩沼までつづく所謂名取耕土の一部分である。』

『かつて大阪外語校長中目覚氏が県教育会で講述……「仙台は都市の地位としてはよいが、城下としてはよくない。仙台は西が塞がっている。（中略）一方岩出山はどうか。第一位置がよい。大崎広土、宮城広土（仙台はこの二つしか支配が出来ない）の外に北上川の平原を支配し得るのみならず、……』

『若柳町……所謂金成耕土の一部であるから米が第一の産物で……』

18. 「我が仙台」（仙台市教育会、昭和8）

『東方と南方とは一帯の平地で、特に宮城野附近からはさへぎるもののない広々とした沃野で、太平洋までつづく所謂名取耕土である。……この名取耕土と……』

19. 「鳴瀬郷土読本」（早坂亀太郎編、昭和10）

『本村は土地全く平坦で一の丘陵だになく、所謂大崎耕土の一部をなし、一望豊沃な田園……』

『……大崎耕土の美田は……』

『憧れの大崎耕土へと……』

『中新田以東は平坦で沃野が開け、所謂大崎耕土の一部をなしてゐる。』

『中新田町は鳴瀬川上流平野が大崎耕土に臨まうとする門戸に位置……』

20. 「宮城県郷土読本」日之巻（宮城県教育会編、昭和12）

『三大耕土。本県の中央部には広々とした沃野耕土が各所に発達している。これらの平地を総称して仙台平野と呼んでいる。……この平野は曾て仙台藩六十二万石の宝庫として誇った沃野耕土で、就中、名取・大崎・金成の三耕土は古来米の主産地として広く知られてゐた。……名取耕土（仙南平野）……大崎耕土（仙北平野）……金成耕土……』

21. 「志田村誌」（志田村誌編纂委員会編、昭和25）

『志田村は大崎曠土の中央に位し……』

『志田村は大崎耕土の一部で……』

22. 「仙台」第7版（小倉 博著、小倉巖増訂、昭和28）

『長町から南下した国道が名取川を渡ると中田で、仙台市の最南部である。地域面積約 11.86 平方軒で、この地は名取川に沿ういわゆる名取耕土で土地も肥え、米・野菜（特に仙台白菜）・甘藷等を産する仙台の豊庫である。』

23. 「宮城県史」16（宮城県、昭和30）

『古川市の大きな特徴は市内に江合鳴瀬の両川を持ち、いわゆる本石米の産地大崎耕土の中心に位置していることである。』

『中新田町以東は、地相が平坦で沃野が連り、いわゆる大崎耕土の一部を成している。』

『三本木町……南方に丘陵の横たわるを見るほかは、一望十里のいわゆる大崎耕土である。』

『若柳町……一方金成耕土と呼ばれた広い水田地帯の開拓がすゝむにつれて、その昔たゞに谷地要害とよばれていた一寒村が、慶長3年〔1598〕、名もはなやかに若柳と改められ、迫川の船着場として絃歌さんざめく水駅とかわって行った。こうして元禄の頃〔1688-1703〕には、すでに現在の町割も出来たといわれている。……船場の町として、或はまた金成耕土を背景とする地域内商業の中心都邑として……』

『八木山……名取耕土がよく見渡され……』

『野草園……名取耕土を越えて福島県相馬郡鶴ノ崎から牡鹿半島に至る眺望は素晴らしい。』

『岩沼町は名取耕土の南端に在り……』

『熊野那智神社……脚下から太平洋に続く名取耕土を見おろす……』

『千貫山……名取耕土を瞰下すれば……』

『下増田村……純農村で……名取耕土の中心部を占めている。』

『加護坊山……大崎耕土はもとより……』

『鳴瀬川は……その流域は灌漑の便良く、土地が肥え、穀倉大崎耕土の一部を成している。』

『金成耕土と呼ばれた広い水田地帯の開拓がすゝむにつれて……』

24. 「宮城県史」8（内「土木概説」（佐々久）、昭和32）

『大崎耕土の内川大堰……名取耕土の名取川利用の六郷堰……』

25. 「宮城県一新風土記」（岩波書店、昭和33）

『特にかつて大崎氏の所領であった古川市の周辺は、大崎耕土とよばれ、県の穀倉地帯となっている。』

26. 「三本木町誌」上、下巻（三本木町編、昭和41）

『北部は広漠たる大崎耕土……』

『大崎耕土においては……』

『大崎耕土には網の目の様に用水堀の網が布かれている。この用水堀によって大崎耕土の水田が耕されている訳である。かく見る時、鳴瀬川と大崎耕土との関係は……』

『本県唯一〔マヽ〕の穀倉地帯大崎耕土の……』

『大崎^{〇〇〇}耕土や奥羽諸山の眺望……』

『北部は米どころ大崎^{〇〇〇}耕土の一劃をなし……』

27. 「日本地名大事典」6（朝倉書店編、昭和42）

『おおさきへいや 大崎平野

宮城県の加美・玉造・志田・遠田・栗原のいわゆる大崎五郡にまたがり、鳴瀬川・江合川で涵養される地帯。大崎^{〇〇〇}耕土の名もある。……冬季の寒さはきびしいが、関ヶ原の戦いの後、藩の新田開発はここに力が注かれ、いまでは宮城県の三大^{〇〇〇}耕土の一つに数えられている。』

『なとりへいや 名取平野

名取川・広瀬川の下流部沿岸、高館（たかだて）台地青葉山台地東縁より東をいう。宮城県の仙南平野の一部で名取^{〇〇〇}耕土の称があり、金成（かなり）平野、大崎平野とともに宮城県の三大^{〇〇〇}耕土といわれる。』

『かなりへいや 金成平野

宮城県の北部、狭間（はざま）の意に由来する一迫川（いちはざまがわ）・二迫川・三迫川が丘陵地帯から平野にて合流している附近、栗原郡金成町、若柳町附近をいう。金成^{〇〇〇}耕土と呼ばれ、仙北平野の西部を占めるが、同平野は大部分低湿地である中で、この金成平野は、大崎平野とともに、良好な水田・耕作地帯をなし、古くから宮城県の三大^{〇〇〇}耕土の中に数えられ……』

『はさまがわ 迫川

……中流部の若柳以西の平野は金成^{〇〇〇}耕土と呼ばれ……』

『なるせがわ 鳴瀬川

……大崎^{〇〇〇}耕土南西部を潤し……』

『せんだいへいや 仙台平野

……この〔狭義の〕仙台平野は別名名取平野とも呼ばれる。』

28. 「古川市史」上、下巻（古川市編、昭和43-47）

『古川は、古来米どころ大崎^{〇〇〇}耕土の中心に位し国道に沿い交通の要地であった。特に明治維新後は、城下町の疲弊するに反して地方商業の中心地として活気を見せ、大崎^{〇〇〇}耕土第一の町となった。』

『仙北平野のうち江合・鳴瀬の二川により灌漑される地帯は、本来穀倉地帯の名をほしいままにしているいわゆる大崎^{〇〇〇}耕土である。……わが古川市の大部分は中央低地帯の仙北平野大崎^{〇〇〇}耕土に、北西部の一部は陸前丘陵に位置を占め……。仙台平野の穀倉大崎^{〇〇〇}耕土の中枢部を占め……』

『南東部は江合川、多田川の両流に灌漑されて穀倉地帯大崎^{〇〇〇}耕土を形成し……』

『海拔10乃至40メートルの大崎^{〇〇〇}耕土の誕生……』

『地味豊かな大崎^{〇〇〇}耕土をつくり……』

『大崎^{〇〇〇}耕土の生命線として……江合川は大崎^{〇〇〇}耕土の北縁を東流し……』

『鳴瀬川は……大崎^{〇〇〇}耕土灌漑上江合川とともに重要な役割を果たしてきた。……藩政時代までの鳴

瀬川は水運の河として大崎耕土に江合川とともに重きをなし……』

『大崎耕土一眸海ノ如ク……』

『大崎耕土を限りなく愛し、……』

『南部一帯は江合川、多田川により灌漑される大崎耕土で……。大崎耕土は一毛作の水田がほとんど大部分を占め、……』

『室町時代大崎氏は大崎耕土を拠点として一時東北に覇をとらえた。大崎耕土の開拓は、水害に安全な山麓地帯からはじまった。……大崎耕土には針・埴〔そね〕・目・塚・木・袋・新田など開拓に関係のある字名を多く見る。』

『大崎耕土の目も部の変化したものであったなら、……室町時代、今の大崎耕土で……』

『大崎耕土のうち……。大崎耕地の北東部……。』

『大崎耕土古川の今昔を……』

『大崎耕土を背景とする仙北の中心都市として……』

『古川市民歌（浜田敏子詞、海鋒義美曲、斎藤たすく編曲、昭和34年8月制定）

1. 大崎の耕土に映える朝の陽を

　　揚げば力あふれきて

　　市民われらの意気あがる

　　おお古川　古川

　　希望の雲よわきあがれ』

『われわれの先祖は今の美しい古川耕土を作り上げるまで……』

29. 「名取耕土」第1－3部（丹野富男、昭和45－48）

30. 「日本地誌」第4巻（二宮書店編、昭和46）

『しかし水田卓越県としての特色は、仙台周辺にも表われていて、とくに「名取耕土」をもつ名取郡の水田率は94.5%であり……』

『……県北地域・仙北地域・陸前海岸地域についてみると、いわゆる「大崎耕土」・「金成耕土」などといわれる水田単作地帯であって、……』

『名取平野』

『大崎平野』

31. 「大崎地方広域市町村計画」（大崎地域広域行政事務組合、昭和48）

『圏域の北西から南東に大崎耕土がひらけ、江合川、鳴瀬川両河川の豊富で清らかな水とあいまって、広大な肥沃な稲作適地を構成し、西部山岳丘陵地帯は広大な森林資源を有する。』

32. 「金成町史」（金成町編、昭和48）

『金成町は……県内第二の穀倉、金成耕土のほぼ中心を占め……東部は金成耕土……』

『町の耕地は平坦部と山間部とに分けられ、平坦部は大部分金成耕土が占め、山間部は傾斜地が

多く、気温・水温も低く耕土が浅い等、農産物の収量が少ない。』

『……現在は国内の米穀過剰を来し減反政策がとられているが、仙台藩時代から領内第一の美味米とされた金成米を作り県内はもちろん日本の米の宝庫といわれる金成耕土という天下に知られた耕地をもつわが町の主産物たることは……』

『金成耕土の中心をなす金成町は水田の多いことは当然であるが……』

『古代、中世の頃の金成耕土を知る文献としては、……このことから金成耕土は遠く820年前相当の耕地が開けていたことがわかる。……』

『「金成村〔村制当時〕立金成中学校々歌」（作詞白鳥省吾、作曲海鉾義美）

二、遥かなる栗駒山に

陣が森小棲の流れ

秀麗の眺め楽しく

広漠の豊けき耕土

見よわれらの輝く学び舎。』

『新（統合）金成中学校校歌（菅原 健詞、佐々 久補。）

二、みちのくの姉齒の松や

金鶏の伝えはふるし

ゆたかなる耕土の文化

うけつぎてわれら学ばん

ああ金成中学校』

『栗駒山の雪、三迫となって流れ、金成耕土を作る。水清くして米美味なり。耕土の南北は丘陵にして、古城耕土に面して点在し……』

33. 「市勢要覧ふるかわ」（古川市、昭和48）

『本市は県北の穀倉地帯大崎耕土の中央部に位置し、古くから米の主産地として知られてきた。』

34. 「小野田町史」（小野田町編、昭和49）

『……東北方平地に扇状に開け、大崎耕土に連なっている。』

35. 「大崎・30年未来のすがた」（都築昭雄、昭和50）

『地勢は、西部に位置する標高1,000メートル程度の奥羽山脈を分水嶺として、丘陵地帯が東部に向かってなだらかに傾斜し、われわれの研究対象の中央部、そして東部一帯は平坦低地となり、いわゆる美田の大崎耕土が形成されている。この平坦水田地帯は……』

36. 「コンサイス地名辞典－日本編－」（三省堂編、昭和50）

『おおさき 大崎耕土＝大崎平野

大崎平野 古川市を中心とする小平野。〔別称〕（地元）大崎耕土、または大崎広土、鳴瀬川・荒雄川による沖積地。17Cから新田開発が進み、豊かな米作地域。金成・名取とともに三大耕

土の一。』

『かなり 金成^〇耕^〇土〔別綴〕金成^〇広^〇土＝かなり平野。

金成平野 栗原郡金成町・若柳町付近、仙北平野西部の低湿な小平野。〔別称〕地元：金成^〇耕^〇土。一迫川・二迫川・三迫川の合流点付近の沖積地、水田単作による良質米の産地。江戸時代は河川舟運により石巻に集荷され、江戸・大阪へ出荷された。大崎^〇耕^〇土とともに県内三大^〇耕^〇土の一。』

『なとり 名取^〇耕^〇土 名取川下流の平野。〔別称〕名取平野。広義の仙南平野の一部。水田と仙台市への野菜供給地。耕土は一説に広^〇土と綴り広大な平坦地の意で平野と同義。一般に沖積地をさす。ここでは閑上浜で限られる七北田川・名取川・阿武隈川下流域をいう。』

37. 「一迫町史」（一迫町編、昭和51）

『栗原郡は……近世を通して現在まで、この地帯は大崎^〇耕^〇土の名のもとに著名な宮城米の産地として名を定めてきている。』

『南は岩出山町、古川市と続き、広い大崎^〇耕^〇土につらなる。この間に丘陵地帯が形づくられて、わが郷土一迫町が位する。そのほとん中央は平野である。俗に迫^〇耕^〇土と称する。この間を母なる川、一迫川が貫流し耕^〇土をゆたかにうるおしている。』

38. 「わたしたちの金成町」（金成町教育委員会編、昭和51）

『ここはひくくてたいらな土地（平地になっていて金成^〇耕^〇土（こうど）とよばれています。……夏川が、金成^〇耕^〇土をながめて迫川にはいり……』

『むかしから、広い金成^〇耕^〇土が開け……』

『……南がわ平地の金成^〇耕^〇土の米づくりとともに……』

『金成^〇耕^〇土が大きな沼のように……江戸時代には、三年に一どぐらいつつ大水になったということとです。』

『金成^〇耕^〇土のまん中を流れる夏川……』

『いまでは、金成^〇耕^〇土のほとんどが整理されて……』

39. 「名取市史」（名取市編、昭和52）

『数多い山城や東北第一の雷神山古墳をなさしめたものは稔り豊かな名取耕土のお蔭であることは論をまつまい。やや時代は下るが名取耕土に取水するため六郷堰が設けられた。』

40. 「ふるさと再見」（読売新聞東北総局、昭和52）

『南郷町……穀倉・大崎^〇耕^〇土の一角にある南郷町の秋は……』

『小牛田町……まだ春浅い大崎^〇耕^〇土に、真黒い煙を吹き上げ、大地を揺るがせて“岡蒸気”が走った。』

『志波姫町……水田でないのは家並みのほかは、南部にわずかに続く丘陵地帯だけ。実りの秋を迎えた志波姫^〇耕^〇土には、黄金の穂波がどこまでも波打つ。この耕土を生んだのは……忠宗の時代に掘られた一本の水路だった。一迫川の水を引き込み、その長さは若柳町まで、約20キロの伊

豆野堰である。』

『金成町……金売吉次の生地とされ奥州街道の宿場として栄えた金成町。金成^{〇〇}耕^{〇〇}土^{〇〇}の……』

『津山町……石巻市北部一帯の水田は「十年一作」といわれた。……この北上^{〇〇}耕^{〇〇}土^{〇〇}救済を旨としたのが、明治42年に内務省から発表された北上川改修工事計画だった。……下流の「十年一作」地帯は見事な^{〇〇}耕^{〇〇}土^{〇〇}に生まれ変わった。』

『河南町……ほとんど不毛の地だった鹿又、前谷地に排水路を設け、広淵沼を干拓し、町の^{〇〇}大^{〇〇}耕^{〇〇}土^{〇〇}〔?〕に変えた。』

『古川市……奥羽山脈に端を発した鳴瀬川と江合川に囲まれる^{〇〇}大^{〇〇}崎^{〇〇}耕^{〇〇}土^{〇〇}。豊かな水路が縦横に走り、見渡す限りの緑の水田は「日本の穀倉」の名を欲しいままにしている。そのど真ん中で、古川市は「日本一うまいササニシキ」を生み育ててきた。』

41. 「宮城県教育百年史」第2巻（宮城県教育委員会編、昭和52）

『南郷町は^{〇〇}大^{〇〇}崎^{〇〇}耕^{〇〇}土^{〇〇}の南端に位置し……』

42. 「宮城県新長期総合計画」（宮城県、昭和53）

『県北西部地域

地域の産業は広域^{〇〇}大^{〇〇}崎^{〇〇}圏^{〇〇}の^{〇〇}大^{〇〇}崎^{〇〇}耕^{〇〇}土^{〇〇}、広域^{〇〇}栗^{〇〇}原^{〇〇}圏^{〇〇}の^{〇〇}金^{〇〇}成^{〇〇}耕^{〇〇}土^{〇〇}などの優良農地を利用した稲作を中心とする農業に特化し……』

43. 「葛西四百年」（佐藤正助、昭和54）

『栗原郡は一・二・三迫川が広げた広い^{〇〇}耕^{〇〇}土^{〇〇}を有しているため〔^{〇〇}金^{〇〇}成^{〇〇}耕^{〇〇}土^{〇〇}〕、宮城県南や海岸部に比して、寒冷であるわりには、古くから米の生産が多く、富んだ地域であった。』

〔以上とは別に、「耕土」の称を採ることなく、「大崎平野」「名取平野」「金成平野」で通している現行の図書資料が、かなり多くあることに注意を要します。〕

仙台地方は、伝統ある豊穠な米どころ、昔百万都市江戸用米の3分の1をみたした本石米、今は名だたるササニシキの主産地であります。とりわけ、大崎・名取・金成の一帯は、見はるかす美田の広がりをもつところ、これを指していう「浩蕩」の文学的表現が、時の流れに幾変化しつつ、いつしか仙台的用法での「耕土」の文字に置き換えられて通用してきました。このような「耕土」の称は、全く特異な用法ですので、全国的に殆ど類例がなく、僅かに、福島県白河市の「^{〇〇}五^{〇〇}箇^{〇〇}耕^{〇〇}土^{〇〇}」〔ごかこうど〕にこれを見出すことができるだけのようです。「^{〇〇}五^{〇〇}箇^{〇〇}耕^{〇〇}土^{〇〇}」は古くからの米どころ、しかも、味のすぐれた良質米の生産地として有名です。「新撰名勝地誌」巻5（田山花袋編、明治44）に次のように記されています。

『白河町……北は阿武隈川の蜿蜿として東流するあり、西には那須、甲子の連山起伏し、南は八溝山の餘脈これを蔽ふ。而して東方の一面開けて所謂^{〇〇}五^{〇〇}箇^{〇〇}耕^{〇〇}土^{〇〇}と称する平地をなす。』

「五箇耕土」の五箇は「五箇村」の村名からきたものです。〔昭和30年3月1日白河市に編入合併〕。また、「大日本地名辞書」第7巻（吉田東伍）に、次の記事があります。

『双石（ならびいし）、板橋、舟田、借宿（かりやど）、蕪内（かぶうち）合せて五箇（ごか）村と改めた。白河市街の東一里半。

古事考云、五箇村とは、城東の五村を指し、米穀殊に甘美なり、天文中〔1532-1555〕已に此称あれば、早くより組合せて呼ばれしなり。』

注(1) 儒者。諱は就篤、一名希顔、字は以貫、六左衛門と称し、閑斎、楽山また白石山人と号した。長州の人、博覧強記、詩文に長じ、又剣道の達人でもあった。はじめ直情径行激越であったといわれたが、溫柔謙虚な人格者で、忠宗に招かれて300石を賜わり、常に側近に在り、又綱宗の侍講をも兼ねた。綱村の命により政宗、忠宗両公の年譜を撰した。晩年多病、致仕して白石山房にこもり詩文を事とした。君公が屢々山房を訪れ、恩遇甚だ厚かった。「封内山海之勝」は、忠宗の遺言によって著したものである。元禄5年〔1692〕10月21日没、68才。墓は宮城郡田中村（後の根白石）にあり、〔白石山房の後山〕唯一つの大石を置いてあるのみ、その遺言によるという。

注(2) 鳴瀬・江合・迫の3川に囲まれた志田・玉造・遠田・加美・栗原は河内〔かわち〕5郡と称せられ、水利に恵まれ地味豊かな地方である。平泉征伐の翌建久元年〔1190〕頼朝は、この5郡に泉田・渋谷・上形〔うわがた〕・狩野の4将を配置した。彼等を「河内四頭」と称した。それから約150年後、南北朝の対立争乱が東北に波及してきた時、足利方の斯波（大崎）家兼が奥州管領としてこの地方に入り定着することになる。斯波氏は大崎氏を称したので、それ以来「河内5郡」を大崎と汎称するようになったのである。「伊達正統世次考」巻8下（伊達綱村編）に次の記事がある。『渋谷、泉田、上形、狩野是曰川内四頭。文治五年頼朝卿治泰衡之後、分守五郡二保。其後令畠山吉良石橋石塔管領奥州。至建武之末。此四頭不従管領指揮。申請之京都。因以斯波刑部大輔家兼爲管領。遂亡石塔氏云。（中略）家兼高祖父尾張守家氏。領下総国大崎。因以大崎爲氏称。此後謂河内五郡亦謂大崎也。』

注(3) 広く大きいこと。

注(4) 佐久間洞巖著。伊達家遠祖朝宗から綱村に至る20代間の歴代の事蹟を記した書。元禄15年〔1702〕序。

資料 「封内土産考」（里見藤右衛門、「仙台叢書」第3巻の内）

「わが古川」（菅原朝歌人）

〔フィクションでの用例：「南小泉村」（真山青果、明治39）『茂ヶ崎耕土の平原が目路の限り軒先からズット前に開けて……』〕